

## 優陀那和上の『首題要義』についての一考察

三 原 正 資

(現代宗教研究所嘱託)

われわれが常に問うていくべきことは、お題目とは何か、そしてそれを唱えることがどのような意義を持っているかということである。このような問いは、例えば宗祖の『法華題目鈔』の「何況法華經の題目は八万聖教の肝心一切諸仏の眼目なり。汝等此をとなえて悪趣をはなるべからずと疑か」(『昭和定本日蓮聖人遺文』三九二頁)との勸誡に添わないものかもしれない。しかしこのような問いがあればこそ、『法華題目鈔』そして多くの著述がなされたのである。現代の人々もまたこの問いを問うであろう。優陀那和上は近代思想の影響の中で、その教学を構築した。この問いに対する答えが見つかれば幸いである。

『妙法蓮華經首題要義』叙述の主旨は、妙法五字は經の名であって法界(本書で和上は「宇宙」という語を使用している。「法界」を現在使用されている宇宙・世界の意味にとってさしつかえないと思う)の名ではないことを論証するにある。

妙法五字が經名であるとは、和上は經とは如来所証の理・金口所説の教・仏身所修の行であり、これを兼名ともい、その本質は諸仏道場に坐して得るところの仏智であるとする。この妙法五字仏智為体説の立場から法界為体説を批判、公通しつつ仏智論を展開したものが本書である。

和上の著述中、經体に就いて論じたものはいくつかあるが、なかでも『經体正論』は「經体只是教之体、非謂諸法之自体」（充治園全集第一編五十七頁）などと簡潔に述べ、『正論』は本書を整理したものと見ることが出来る。

## 一、妙法五字法界為体説

法界為体説の依拠として本書で取り上げられているものは、天台大師の『法華玄義』、宗祖の『観心本尊抄』、『当体義鈔』である。

『法華玄義』に就いては「大師序云、妙名不可思議也、法者十界十如權実法也、蓮華者譬本迹施開闢」（十三頁）と示し、このなかの法の説明が直ちに法界を指して經体と為すものと解釈され、「学者疑惑」（十六頁）を来たしたと指摘する。この中で和上は大師の五重玄義を略説しつつ「若夫直指方法実相依正当体以為此經之体者大違余四重立文章」（十五頁）と述べ、また直ちに実相法界を指して体と為すならば、「一切諸經諸法皆同実相為体、果然何須別説言法華実相為体乎」（十五頁）と重大な疑問を呈する。

『観心本尊抄』に就いては、「今本時沙婆等」のいわゆる四十五字法体段は直ちに法界の全体を指して妙法と為すのかとの疑問に対して、「凡妙法五字所詮約之仏心所証行者所觀……法界得全為妙法実体也。若屬之衆生迷中所見、則法界未得全為妙法也」（三頁）と述べて会通する。

『当体義鈔』（『録内扶老』の『当体義鈔』偽撰説に対して和上は真撰説を強調したと『日蓮聖人遺文辞典』渡辺宝陽師稿は言う）に「十界依正即妙法蓮華經之当体也」とあるのは、「約仏所知見言之」（三頁）であり、また仏が正覺を成じたときに「正得法界全是妙法蓮華当体」（十七頁）のであると言う。あるいは観行（修道上）の便宜に約したものである（十九頁）と為す。

現代のわれわれからこの法界為体説をみるならば、和上が天台大師の用玄義を説明して用とは本迹二門の開顯・説

法の力用に就いて述べたものであり、全法界（宇宙・世界）の無辺の力用に就いて述べたものではないと示した（十五頁）ことから理解されるように、仏や法を宇宙の真理と考える立場（浅井円道師『首題要義』解題参照）である。しかしこのような考え方は、和上の『妙宗本尊略弁』にもみられる（『現代宗教研究』第二十二号拙稿参照）のである。

## 二、妙法五字仏智為体説

法界と仏知見いわゆる境・智の關係に就いては、『一念三千論』には「境必依智顯……正智亦由妙境顯、故法華妙境為重」（二二一―二六七頁）、『經体正論』には「仏子所伝在智不在境可知、雖妙境是本有必依妙智現前」（五十五頁）とあり、「境智必相成」（五十七頁）。すなわち境智は不可分な關係にあるものとしつつも、兩者の比重は必ずしも等分でない。では、法界為体説に対して仏智為体説を主張した理由、また仏智の本質とは何か。

本書では法界差別の世界はその当位のままに「本是妙法」（四頁）であるが、それは衆生の所知見においては魔法としか見られない。このように衆生の所知見において魔法と見られざるをえないものを本来の妙法として見る事ができるのは、「諸仏坐道場之所証」「行人決定智心」（四頁）、すなわち仏智に依るとする。これを自然と詩・画の關係に譬えて説明している（十七頁）。

『一念三千論』では、十界差別の世界がそのまま妙法であるといっても、それは差別が存在しないということではない。「十界差別故互具有功互融有徳也」（二一九十頁）である。かりに「仏果化現十界」（同）であるならば互具に何の意義があろう。すなわち「仏智妙而於差見無差」（同）ことができるのであって、「見其互具互融但在仏界」（同）ことを知らねばならないと説き、これを眼光と日光の關係で説明して（二一九十二頁）、仏智のはたらきの重要性を示す。

このように仏智を重視して、本書で「妙法唯<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>仏智<sub>ニ</sub>而能<sub>ク</sub>知<sub>ル</sub>見<sub>ル</sub>之<sub>ヲ</sub>耳……而此妙証即<sub>チ</sub>仏陀<sub>ノ</sub>所授行者之所禀文字之所詮<sub>ニ</sub>正是<sub>レ</sub>經<sub>ノ</sub>体<sub>也</sub>」(十八頁)と仏智を体を強調する理由は、すでに触れたように法界為<sub>レ</sub>体説においては「一切諸經諸法皆<sub>レ</sub>同<sub>ニ</sub>実<sub>ノ</sub>相<sub>ヲ</sub>為<sub>レ</sub>体」。すなわち迷中の衆生とその世界も実相法界といわれ、妙法の体とされるのであるから、ここでは殊更に妙法蓮華經を受持する意義はないと思われる。

たしかに「火熱水冷是<sub>レ</sub>諸法<sub>ノ</sub>実<sub>ノ</sub>相、火若<sub>シ</sub>冷<sub>ニ</sub>非<sub>ニ</sub>妙<sub>ノ</sub>法<sub>也</sub>、水若<sub>シ</sub>熱<sub>ニ</sub>非<sub>ニ</sub>妙<sub>ノ</sub>法<sub>也</sub>」(三一九十頁)であるが、衆生においては火の熱は時には苦痛であり、冷たい水は樂として受けとられる。すなわち衆生においては世界の諸現象に対して違順・憎愛の感情が起こり、仏にあっては取捨の心がなく(三一七〇頁)。そこで、かりに宇宙の真理を仏とみたとしても、宇宙の真理の受けとり方は仏・凡においては天地の隔異があると云うべきである。ここに仏所知見の実相法界を衆生の所知見と為すべく、仏智としての妙法五字を受持しなければならない意義が存するのである。

この仏智に就いて、和上は『綱要止議』において「故<sub>ニ</sub>知<sub>ル</sub>、五<sub>ノ</sub>字<sub>ニ</sub>但<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>妙<sub>ノ</sub>智<sub>耳</sub>。然<sub>ル</sub>単<sub>ニ</sub>約<sub>ニ</sub>仏<sub>ノ</sub>自<sub>ニ</sub>行<sub>ニ</sub>猶<sub>ニ</sub>妙<sub>ノ</sub>智<sub>而</sub>非<sub>ニ</sub>妙<sub>ノ</sub>名<sub>也</sub>、乃<sub>チ</sub>利<sub>他</sub>、因<sub>ニ</sub>緣<sub>ノ</sub>約<sub>ニ</sub>声<sub>ノ</sub>色<sub>ノ</sub>立<sub>ニ</sub>妙<sub>ノ</sub>名<sub>也</sub>」(二二四一頁)とまで述べるのであるが、仏智の本質をいかなるものと考えていたのである。

和上は、仏智とは「修成」(二二一頁)によって形成されたもの、「心之<sub>ニ</sub>発<sub>ル</sub>」(同)。すなわち、われわれの心が開發されて仏知見となったものという。『一念三千論』では「智<sub>者</sub>心<sub>ノ</sub>對<sub>ニ</sub>物<sub>ノ</sub>如<sub>ニ</sub>所<sub>ノ</sub>對<sub>ニ</sub>境<sub>也</sub>……識<sub>陰</sub>用<sub>也</sub>、情<sub>者</sub>心<sub>ノ</sub>隨<sub>ニ</sub>所<sub>ノ</sub>對<sub>ニ</sub>境<sub>生<sub>レ</sub>違<sub>レ</sub>順<sub>也</sub>、起<sub>ニ</sub>憎<sub>ノ</sub>愛<sub>ノ</sub>之<sub>レ</sub>心<sub>是<sub>レ</sub>也</sub>、是<sub>レ</sub>正<sub>ニ</sub>行<sub>ニ</sub>陰<sub>ノ</sub>用<sub>也</sub>……凡<sub>夫</sub>但<sub>レ</sub>依<sub>レ</sub>情<sub>……</sub>仏<sub>ニ</sub>但<sub>レ</sub>依<sub>レ</sub>智<sub>」</sub>(二二一七〇頁)と述べ、仏智も凡情もともに同じ心であり、はたらきがちがうのみとされる。</sub>

本書では、この仏智を非常に軽い意味である「心術」(二十頁)とも称している。そこで台祖・宗祖ともに妙法の体を法界と為すのに比べて、「今何<sub>レ</sub>容易<sub>ニ</sub>妄<sub>ニ</sub>言<sub>ニ</sub>心<sub>ノ</sub>術<sub>等<sub>乎</sub></sub>、況<sub>ニ</sub>取<sub>ニ</sub>智<sub>ノ</sub>覺<sub>ヲ</sub>為<sub>レ</sub>体<sub>非<sub>ニ</sub>宗<sub>ノ</sub>体<sub>相<sub>ノ</sub>濫<sub>耶</sub>」</sub>(二二一頁)という問いを構え、これに対して「二門<sub>ノ</sub>開<sub>ニ</sub>覺<sub>全<sub>不<sub>過</sub>坐<sub>道<sub>場</sub></sub></sub>一念<sub>ノ</sub>智<sub>覺<sub>也</sub>」</sub>(同)と答え、妙法の体を心術というのも不当ではないとしている。</sub></sub>

このように和上は衆生知見とは全く異なるかに考えられやすい仏知見を、衆生と仏に共通する心、すなわちわれわれ普通の人間の心の開発されたものとみなした。故に、仏知見の主体者として神の如き特別な超越的実在者を措定してないことに注意すべきである。ここに近代主義者としての和上の面目があり、それは後人によって批判された点でもある。

しかし河合隼雄氏が『宗教と科学の接点』（岩波書店）にあらわしたように、心こそは種々の可能性を感した未知の領域であることの重要性を考えるべきであらう。

### 三、「直究本経」ことについて

本書において和上は「仏自住大乘」の文に註釈を加えるなど（四頁）、妙経の法体を仏智に求める過程で「直究本経」（三十八頁）めようとしたりした。この点において和上の態度は、師である本妙日臨律師と対照的である。

律師は『朝田薩庵に与ふる書』の中で、「抑も高祖はいかなる人ぞや、無始の昔に既に成道し玉ひて、衆生を化せんか為に、菩薩となり、又凡夫となり玉へる、元来本法所持の大士なり、一言として妙法ならざるはなし、何ぞ経釈本拠の有無に局せん、其経を求め、釈に依り玉へる如きは、是れ世人をして信ぜしめんが為なり」（臨全一五三頁）と述べ、これに対して和上は『庚戌雑答』に「蓮祖ノ大功ハ釈尊ヲ尊奉セルト法華経ノ殊勝ヲ顕シ給フトニアリ」（四二七二頁）と記す。すなわち律師は祖書に依って教学を立て、和上は教学の根拠を法華経に求めたのである。（余談になるが、現代のわれわれには内にあつては律師の信念、外に対しては和上の態度が必要であらう）

本書を読むとき法華経の引用の多さに気付く。例えば「然專論経正意則始終以智為乗詮、故云欲令衆生開仏知見……」（六頁）などと十例の経文を挙げて、法華経の目的が仏智を顕わすことに在ることを述べている。さらに『経体正論』に「台祖宗祖俱以法界為経体、其意則可知。既经文分明以智為教詮、不可復惑。乞莫泥著釈相而生老婆論」

(五十八頁)と述べて、妙法五字仏智為体説を法華經に依て樹立し、それによって祖書を判断、会通したことを明確にしている。

和上はなぜこのような方法を取ったのであろうか。それは本書でも「經卷者何、如壽量品・分別品・惣勘文鈔・始聞仏乘義・当体義鈔・授職灌頂鈔・十法界鈔・御義口伝・觀心本尊等是也」(三十五頁)と示しているように、今日からみると真撰偽撰の混在する祖書のすべてを、和上が宗学上の根柢としたからではなからうか。

和上は、本書で「祖判中正示妙法五字所召者本尊抄一篇而已。余鈔皆涉他義不及此」(三頁)と述べている。「宗之正体只是智、是則由智成因果也」(五十八頁)とあることから、それは主に三十三字受持讓与段を指していると思われるが、この一文は和上の識見の高さを示すとともに、真偽混在に起因する祖判の多義性が和上をして直ちに本經を究めることを促したともみられる。

法華經の所詮は仏智であり、唱題受持によってその仏智をわが心として広く菩薩行を修すべきである、これが本書において和上の語りたかったことである。仏智とは差別の現実世界に無差別を実現していこうとする慈悲の精神である。知恵と慈悲は至極当然な仏教の主張のようであるが、いまだ狂気の支配する今日の世界の悲惨な状況を省みるとき、もっとも必要とされる精神であろう。たとえば『核戦争を待望する人々』(朝日選書)は、「ヨハネの黙示録」にあるハルマゲドンの戦いを核戦争と考えるアメリカの聖書根本主義者を描いたものである。これをみると、世界は正しい宗教を必要としていることが理解できる。エゴイズムと狂気ではなく、智恵と慈悲を人々の心に育てていくことが「お題目総弘通」運動の本質であるべきであらうと思う。

※本稿は平成元年十月二十七日第四十二回日蓮宗教学研究発表大会で発表したものである。